

論文 第三

リスボン大地震とポルトガルの文人ペデガシエ

第一節 フランス月刊誌『ジュルナル・エトランジエ』

とリスボン通信員ペデガシエ

第二節 ペデガシエの画業『リスボン荒墟の偉観』と王都中心部の惨禍

第三節 小冊子『リスボン地震に関する正確な報告』と

同書をめぐる日本地震学会の論議

第一節 フランスの月刊誌『ジュルナル・エトランジエ』と

リスボン在住通信員ペデガシエの報告

- 一、『ジュルナル・エトランジエ』の刊行とポルトガル学芸の紹介
- 二、通信員ペデガシエによるリスボン大地震の記録
- 三、スペイン通信員による震災の報告

一、『ジュルナル・エトランジエ』の刊行とポルトガル学芸の紹介

小説『マノン・レスコー』の著者アペ・ブレヴォーは一七五四年五月パリで雑誌『ジュルナル・エトランジエ』*Journal Etranger* を発刊した。刊行の趣意書によれば、古来フランスは学問、文学、芸術に関する英知を、イタリヤ、イギリス、スペインなど近隣諸国から摂取してきた。とはいえ、これらの国々で日々創出される優れた作品は、ほとんど知られていない。こうした状況に鑑み、ブレヴォーは発刊の意義をつぎのように述べる。

これら多数の作品を集成する難しき、孜孜たる勉勵を要する言語の相違、膨大な書物から悪しきものを選ぶ危険、こうした障害が現在まで克服されずにきた。さまざまな現代語で表現された、すべての分野における世界のあらゆる学者・芸術家の知見、発見、傑作を集成した著作があれば、フランスおよびヨーロッパにどれほど利益をもたらすか、ときおり人々は思索した。私たちが公衆に予告する定期刊行物の企図は、ま

さにここに存する。①

このような趣旨によって同誌にはフランスを除く各国の学芸が同誌に包含され、無知や偏見によって久しく排除された作品も採択される。また、従来軽視されている演劇、公文書、最新情報なども収録され、これらすべてがフランス語に翻訳される。創刊の前年ブレヴォーは『ジュルナル・エトランジエ』の出版許可を王権から取得し、さらに国際的な情報網としてヨーロッパ各国に通信員と協力者を設定した。②

『ジュルナル・エトランジエ』が頒布される範囲は、「リスボンからベテルスブルクに、またロンドンからヴェネチアに至る」地域まで、購読の予約者は千余名に及ぶ。同誌に記載された予約者名簿には、筆頭に国王（ルイ一五世）、オルレアン公、コンデ公・同公妃、デンマーク国王・同王妃、プロシヤ国王、ポーランド国王・同王妃など二人の王侯が列記され、フォントネル、ヴォルテール、モンテスキュー、ダランベール、エルヴェシウス、ルソー、グリム、ドルバックなど啓蒙の哲学者、国務大臣ダルジャンソン、ポーランド大使プロイ、租税法院院長マルゼルブ、パリ警視総監ベリエなどの政府要人、ナッソウ・ザールブリュック公妃、ボンパドゥール侯爵夫人、グラフィニ夫人などの著名な女性、オーストリア国事顧問アルベルテイ、ダンケルクの卸売業ドリユール、ベルリン科学アカデミーのカホイサックなど外国人購読者が見出される。さらには多くの医家、弁護士、商人、ブルジョワ、聖職者とともに、ロンドン八三名、ベルリン二九名、フィレンチェ二五名など計一三七人が氏名不詳の購読者として記載された。一般の人々にも頒布・閲読の便宜をはかるため、フランスの地方都市やロン

① *Journal Etranger, ouvrage périodique, avril 1754, Paris, p. xxxiv.*

② *Henri Roddier, L'Abbé Prévot, l'homme et l'oeuvre, Paris, 1955, pp. 184-185.*

ドン、ローマ、ワルシャワなどについては、そこに居住する協力者の名前が明記された。①

予約者名簿の豪華な顔ぶれは、プレヴォーの社会的信望と幅広い交誼の賜物であった。多くの文学作品を執筆した彼は、一七三三年から学芸の情報を伝える週報『プール・エ・ロントル』Pour et Contre を発行し、かつまた浩瀚な『旅行記通観』Histoire Generale des Voyages 全一五巻の編著でさらに世評を高めつつあった。ちなみにこの叢書には大航海時代の記録が集積され、初巻にポルトガル人カスタネダの著書『インドの発見と征服』の仏訳、第五巻から第七巻までにはチベットの、中国、朝鮮へのさまざまな紀行が収録されている。遍歴と波瀾の人生ではあったが、彼はシャンティイ城主コンデ公の告解司祭をながく勤め、晩年にはローマ教皇ブノワ十四世よりルマン司教区ゲネのサン・ジョルジュ修道院長に任じられた。② 『ジュルナル・エトランジェ』刊行の第二年にプレヴォーは当初の企画を充実させ、読者を広い視野と豊かな教養へ導くため、自身の執筆による連載「歴史的探究」を開始した。すでに契約した各国の通信員に助力を求めながら、一月号では古代から近代に至るイタリアの芸術と学問を概観し、翌月にはとりわけトスカナ地方の美術や文学について論究がなされた。ついで三月号にはポルトガルの文化について詳しい論述が掲載される。

リスボンにおける本誌通信員のひとり、祖国の名譽をも真理も探究をも熱望する人物が、私たちに寄せた

① *Journal Etranger*, avril 1755, pp.i-xxx. mai 1755, pp.238-240.

② *Abbé Prévost, Avertissements de l'histoire Générale des Voyages, dans Oeuvres de Prévost, Grenoble, 1985, tome VII, pp.400-401, 408-409, 418-419. Henri Roddier, op.cit., pp.37-38, 47, 142-144.*

覚書のなかで快く真情を吐露した。学問の隆盛が長きにわたる幸福な国々に較べ、ポルトガル文学の黎明はそれほど遠く遡ることを要しない、と。彼はふたつの理由を示し、そこには誠意が感じられた。その第一はポルトガル国王が手薄な保護しか学芸に与えないことである。また、第二には異端審問が惹起した恐怖の深淵であって、これこそ魂を麻痺させ、理性を真の隷従に繋ぐものである。

しかし、この明敏な通信員は自国の学芸の現状を安易に糾弾するのではない。個別的な名前や事象を挙げ、それらがやはり大半のヨーロッパ諸国でも尊重も奨励もされていないことを明らかにする。フランスとイギリスも例外ではない。彼によれば、揶揄は有害であり、阿諛は卑劣である。利害に捉われず、宗派に立たぬ判断を、祖国に下したいと彼は望む。

ドン・ジョセフ一世の統治が栄光の時代の暁を告げた。この偉大な君主は学問と芸術を尊重し、保護した。彼は褒賞を設けて、競争心を喚起した。われらの歴史家は詩的に言い添える。大地の神々が文芸の隆盛へ導いたのは、そのときすべてが神意に合致したからだ、と。武力と学問によって臣下が全ヨーロッパを支配するようルイ大王は望み、みなはそれに従った。数年でピエール・アレキサンドロヴィッチは未開の民族を学問に秀でた文明国民に変えた。そこに存するベテルブルグ王立アカデミーの提供によって、リスボンの王立アカデミーが学殖豊かな著作の輝かしい証左を受理したのである。エリセイラ伯爵がドン・フランソワ・ザビエル・メネゼスが自国語による貴重な抜粋でそれを普及させた。ポルトガルの文芸が、それを愛好し、褒賞によって奨励する偉大な国王のもので、どうして発展せずにおれようか。①

① *Journal Etranger, mars 1755, pp.3-4.*

通信員より提供された情報に依拠しながら、ブレヴォーはまずポルトガルにおける言語学と詩学を概観し、ついで六人の哲学者、デカルトの動物精魂説を連想させるゴマス・ペレイラやローマで名声を得たアントワーヌ・ヴェルネについて論述される。また、歴代の国大生はとくに数学を奨励し、新たな学院を創設する一方、卓越した学者エマヌエル・ダ・マヤの講義をみずから受けた。以下「歴史的探究」におけるポルトガル紹介は、法学、歴史、神学、雄弁術、文学、軍事学を包摂し、二四頁の長文に及ぶが、ここでは参考までに医学の状況に関する記述のみを引用する。

解剖学と外科学については、ふたつの学問の発展が相互に依存するものの、ポルトガルでは僅かに開発されたのみである。医学および外科学にとって解剖学がいかに肝要であるかを、ドン・ジュアン五世は認識され、リスボン病院に講座を開いて、創設期の講義のためイタリアからサンテュチ氏を招聘した。この教授が逝去したあと、カタロニア人モン・ラバトが講座を引き継ぎ、新たな希望を抱かせた。しかし、現在までポルトガルはかくも有益な基金の成果をあまり活用していない。相変わらずこの国の内科医と外科医は、己れの領域で完璧な域に達したと過信している。危険な自惚れであって、みずかわの進歩を遅らせるにすぎない。とはいえ、内科医には診断が、外科医には技術が必要であって、解剖学への関心も芽生えたいま、ガリエンによって（心眼）と名づけられた認識、久しく等閑にされた認識を身に付ければ、こうした学問の発展をなにごとも妨げはしないと期待できる。「原註」一般にポルトガルの内科医は慢性的な病気よりも急性疾患の治療に成功するが、その原因を示すことは難しい。

なお、こうした判断で例外とされるのは、若干のポルトガル人であって、幸運にも外国で習得した学識をも活かし、彼らは自国の医学にも貢献したのである。この種のとくに偉大な医家のひとり、サンチェス氏はロシア宮廷で卓越した存在としてながく認められ、幸ある老境にはバリへきて、名声を博した。

〔原註〕現在は二つの都市、リスボンとコインブラに解剖学の講座が置かれている。①

同年の八月号でブレヴォーは刊行者の任務をエリー・カトリーヌ・フレロンに引き渡すと宣言し、同誌編集の方針はいささかも変らぬと確約した。後者は同じ時期にみずから開始した『文芸年報』L'Année littéraireの刊行によって、啓蒙思想の宿敵として後世に伝えられる。しかし、後継者を推挙するにあたってブレヴォーは、種々の作品を著した名高い文筆家、知性と学識と雅趣を要する企画に適切な人材と語っている。②

二、通信員ベデガシエによるリスボン大地震の報告

ポルトガル在住の通信員ミグエル・ティベリオ・ベデガシエは、多芸多才な人物として知られ、戯曲や伝記を書き、画筆を握るとともに、一七五三年十月二六日には日蝕を観測した。彼の両親はバスク出身でリスボンで御売を営むビエール・バプチストと、砲兵大尉の美しい娘ドロティア・マリアである。巫女の力をマリアは秘めたとの伝説があり、彼女の靈感によって多くの井戸も掘り当てたとされる。③「歴史的探究」に素材を提供したポルトガル通信員に関して、ブレヴォーは氏名を書き添えていないが、語学にも堪能な頒布者協力者ベデガシエであろうと推察できる。ちなみにリルボンにおける購読予約者は彼の父ビーエルをはじめ、貴族デ・パロス、閣僚

① *Journal Etranger*, mars 1755, pp.13-15.

② *Journal Etranger*, août 1755, pp.4-6.

③ Jean-Paul Poirier, *Le Tremblement de terre de Lisbonne*, Paris, 2005, pp.18-21.

デ・ラ・セルダ、神父アベ・ガルニエ、さらに氏名不詳の三一名とされ、ペデガシエ以外の通信員は誌されていない。

新たな刊行者フレロンをも支援すべく、ペデガシエは自国の習俗や産業について筆耕を続けたと思われる。そのときリスボンの大震災が襲来し、彼の草稿もまた消え失せた。ここに訳出するのは地震発生の十日目にフランス語で書かれ、『ジュルナル・エトランジェ』一七五五年十二月号に掲載された書簡の全文である。

ポルトガル通信員から本誌特別会員クルセル氏に宛てた書簡

拝啓。ポルトガル全土と住民の大半が犠牲になった災厄。これを描写できるほど強烈な筆墨を私は持つておりません。私たちに対して地水火風が連合し、私たちを破滅させるべく競い合うと想像してください。こうした絵図をいかに怖ろしく描こうと、実際には程遠いのです。しかし、詳細な情報が皆様に必要であり、この破局を努めて記述しましょう。

十一月一日は気圧計二四インチセライン、列氏温度計一四度(華氏一七・五度)。爽快な大気、晴朗な天空であり、午前九時四五分大地が僅かに揺れたものの、快速の四輪馬車に乗った程度に人々は思いました。こうした最初の震動が二分間続きました。それから二分間の間隔のあと、新たに大地が激しく揺れて、大半の建物が引き裂れ、倒壊し始めました。この第二の震動が約十分続きました。同時に煙塵が拡がり、太陽が陰るまでになります。それが二、三分続いたあと、きわめて濃密な煙塵が消え、たがいに顔を見合わせ、確認できるほど、太陽が明るくなりました。その直後凄まじい震動が発生し、それまで耐えてきた建物も微塵に倒壊したのです。天空がふたたび暗くなり、大地は混沌の暗闇に戻るかのようでした。生き残った者の涙と叫び、死に瀕する者の苦しみと哀願、大地の揺れと闇の世界が、恐怖と不安を募らせます。しかし、二〇分後にすべて静かになりました。すぐさま脱出し、田舎に避難しよう、とだれしもは思います。だが、災

厄はまだ峠にも達していません。人々が一息つく間もなく、首都のあちこちで炎が現れ増した。強烈な風がそれを煽り、いかなる希望も許しません。火災の勢いをだれも止めようとしません。なおもたえず地震が続き、人々は自分の命を護ることしか考えません。あらゆる様相で剥き出しになった亡骸に彼らは囲まれており、実際には微弱な地震でも過度に強烈と感じるのです。

首都の水没という海の脅威がなければ、火災に対してなんらかの対処を採れたかもしれません。動転した民衆、すくなくとも彼らは海から遠く隔てた地域、海からの浸水を到底予想できない地域にまで、怒濤が押し寄せるのを見て、すぐにそう考えました。

若干の人々は海上のほうがむしろ安全と信じ、そこに逃れました。しかし、軍艦、船舶、小舟が巨浪によって海底に難き倒されて、相互の衝突で微塵に砕け、なおも凶暴に引き戻されて、水の犠牲者もろともそこに呑み込まれます。この上げ潮と退き潮は日中のすべてと夜間のほとんどで続き、五分毎に勢いが増すように感じられたのです。

こうした日々の間恐怖心はいちども消えませんが、十一月七日金曜の午前五時非常に激しい揺れがあり、災厄がふたたび始まるのかと思つたほどでした。厄介な破目にはならず、震動が規則的なので、出て行く船にも似ています。地震の最初の日甚大な被害を惹き起した地震では、すべての揺れが逆の方向へ働き、真つ向からの衝突によってきわめて簡単に牆壁が割れました

きわめて大きな揺れが極光の始まりに生じることに、私は気づきました。ポルトガルで記憶された最大の氾濫、九フィートを海が乗り越えたとき、人々は確信しています。リスボンにおける死者の数が正確にはまだ判りません。三万人から四万人に達するであろうと推測されています。なぜなら、民衆が満ち溢れたすべての寺院が倒壊し、祈禱を捧げきたか、怯えて避難したほとんどすべての人が、瓦礫の下に葬られたからです。

十一月二日の朝テージュ河がところにより幅八マイル(約十二キロ)を超え、首都の乾燥地帯にまで迫る

のを見て、私は驚倒しました。片側の地帯では水底を見通せるほどの浅い溝が出現したのです。

ポルトガルのほとんど全土が災害に見舞われました。アルガルヴ王国、セツヴァル、ポルト、アレンケル、美しい教会を破壊されたマフラ、オビドス、カスタンヘイラ、周囲八十マイル(約一二〇キロ)にわたるすべての都市が、壊滅に近い状態となりました。

以上のように命がけて私は危地を脱出しました。なぜなら、家財や宝石や銀器やそのほかなんであれ、私のあらゆる財産は、完全に焼き尽された自邸の石と灰の下に埋もれたのです。厳選された三千巻の蔵書、その多くは学芸共和国で栄誉を博した私の著作も喪失しました。しかし、もつとも残念に思うのは、きわめて稀有な草稿四十冊のほかに、ポルトガル人の習俗、習慣、謬見、研鑽、さらにはポルトガルの工場、治安、政体に関する書簡体の著作です。これこそ六年に及ぶ勉勵と省察の成果であり、ポルトガルへの歴史的論究、モレリ辞典のポルトガル関連項目に対する批判的検討、そして自己の天文学的な考察や月の大気についての論究など、さまざまな題目への専門的論文をも含むのです。とはいえ、今回の悲劇的な出来事によって私が失った十萬エキュに較べれば、これは軽度の損失にすぎません。

住む家がないため、田舎の真中で私は皆様への書簡を綴っております。リスボンには消滅し、これまで位置した地域にもはや再興できません。夏には宮廷を営み、離宮を所有されるベレン城市に、国王が新たなリスボンを建設されるものと信じます。

どうぞそちらの情報をお知らせください。私を襲った災厄も皆様との交流をけつして冷却させず、いつに変わらぬ熱意と献身をもって『ジュルナル・エトランジェ』への協力を続けるつもりです。 敬具。

一七五五年十一月十一日、リスボンにて

ペデガシエ①

ペデガシエの報告は際立つて精細かつ客観的な記録であり、メンドンサの名著『世界地震通史』に多くを摂取されたほか、J・P・ポワリエなど現代の研究者からも高く評価されている。のちに彼はリスボンの文学アカデミー会員に選ばれ、ポルトガルの学芸再興に指導的な役割を担った。

三、スペイン通信員によるアンダルシア地方の震災

震災以前の『ジュルナル・エトランジェ』には前述の「歴史的探究」のほか、リスボンからの寄稿としてアイレス・アモス・エカの哲学論文やトマス・ヒルの頌歌も収録された。しかし、一七五六年にはペデガシエをも含め、ポルトガル人の著述が見当らず、荒廃の深刻さを感じさせる。とはいえ、刊行者フレロンは同年の一月号と四月号にスペインの地震記録を掲載し、未曾有の災害に関する情報を倍加した。一月号に収録された通信員の書簡は、アンダルシア地方の震災についてとくに詳細である。ここでも通信員の氏名が見出されないが、同国の頒布協力者としてはヴァレンシア在住のケルネルが明記されている。マドリッドでは病院経営者プイギと氏名不詳の十一名が購読予約者であった。

① Miguel Tiberio Pedegache Brandao Ivo, Lettre du Correspondant du Journal Etranger écrite à Lisbonne dans *Journal Etranger*, décembre 1755, pp.235-239.

スペイン通信員からフレロン氏に宛てた書簡

拜啓。リスボンを破壊した不意の怖ろしい地震は、錯綜する噂、真実に脅威と恐怖を混入した話を千余も産出しました。あらゆる人間が錯乱し、いわば足元で浮沈する地盤とおなじく、住民の動揺が激しいのです。鎮静がなされ、真偽の判断と確かな認識へ至るには時間を要します。ご承知のとおり、ポルトガルの首都と同じ日、ほとんど同じ時刻にマドリッドとカデイスで地震を感じました。しかし、想像を絶する現実の無秩序がいかに激甚であるか、スペイン中央のほぼ全域がどれほど悲惨に覆われたかは、おそらくご存じないのです。

カデイスでは唯一の震動が朝十時に始まり、約五分続きました。若干の家屋が倒壊し、ほかの家の壁はひび割れ、大半の教会が被害を受けました。最初の混乱が過ぎ、町の城壁まで来た人々が、いま目撃した災害について話しかけた途端、地震を発生させた地底の動因に突然押しされ、ル・モレ、ラ・カレット、ブエルト・ピオジョ、そのほか若干の地域で大海が氾濫を惹き起しました、(風もなかったで、他の動因はありえませんが)この海嘯は怒濤をなして一旦引き、すぐさま再度押し寄せたのです。上げ潮と引き潮は終日続いて、すべての住民が警報で制せられ、彼方の惨状におののくばかり。洪水は下水道を通って爆音とともにヌーヴ街に入り、アランスールの街路に満ち溢れ、刻々と町全体を沈没させるかのようにでした。テール門の堤防で二手に分け、すぐさま合流した荒潮は、路上にいたあらゆる人々、二五〇人あまりを抹殺します。ラ・カレットにおける氾濫もおなじように凄惨でした。洪水がヴィナと呼ばれる地域全体を一気に水没させ、要塞の壁を無惨に突き抜きます。さらにまた、(新救護院)まで岩石を押し流し、施設の脇にあった横木、建築に用いる資材とともに山積みしたのです。

無数の善男善女から成るロザリオの行列は、午後二時から深夜三時まで中断もなく挙行されました。公的な祈禱もこれに劣らずながく、暁に人々はやや落着きを取り戻したようです。

カデイスの近郊でもすべての町が同じ運命を辿りました。ロタ、メデイナ、ヴェゲル、サン・マリ港、サン・ルカス・ド・バラメード、カルモーナ、ラ・ブエブラ、モゲール、コニル、マラガ、ギブラルタールでは、幾百の建物の瓦礫に碎かれるか、海流の高波に呑まれ、沢山の住民が死亡しました。

同じ日の同じ時刻にセヴィリアでも地震が発生し、八分間続きました。絶命したのは僅かですが(十名から十二名)、町ではいくつかの建物が全壊し、完全に被害を免れた家はありません。あらゆる建築のなかで教会の破壊がもっとも甚大で、イエスズ会の楼閣、サン・フランソワ、大聖堂もそこに含まれます。大聖堂の堂塔では風見鶏を配した中央の円柱が最初に崩れ、四方に破裂して売場の横手に墜落しました。地震のさなか会堂がが極度に隆起し、風にそよぐ葦のように、塔が空中で揺れ動くのを見たのです。四十以上の教会、修道院、小教会、礼拝堂、救護院とともに、大聖堂も実際にほとんど全壊しました。

この日公的な広場の中央で人々は聖なる儀式を捧げ、引続き行列を開始して、夜もすがら歩きました。それは神の怒りを鎮め、激震の間にも顕れたとされる奇蹟に感謝するためでした。

コンテ・ド・ニエブラでもすべての村落がほぼ全滅しました。フェルヴァも同じ運命に陥り、死者は六名にすぎぬものの、イワシ漁に出た三〇〇人が、沿岸で海流に奪われました。アヤモントとカタロニユの漁夫も数千人が水死。アヤモントとアルプセイラには足跡すらなく、住民の死亡は一五〇〇人に及ぶとされます。ファヴォはあまさず水没し、三〇〇〇人が溺死しました。

グラナダでは同日十時十五分前に地震を感じました。すべての家屋が揺れ動き、深夜の二時から三時にかけて余震もありましたが、被害を受けたのは教会だけです。参事会教会はもっとも損害を蒙り、いまや立て直すことが課題となりました。ここでだれかが死んだとは、聞いていません。アルカラータ・ラ・ロワイヤル大聖堂とマラセーナ大聖堂はともに倒壊しました。後者の所在地、ゲベジャールと呼ばれる村落では、大地に激しい地割れが生じ、その裂目は日々広さと深さを増しています。すべての住民がそこから離脱しました。

四日後この深淵に村落の全域が併呑され、いまもそのまゝの状態です。

同じ日の九時五十分にコルドバのすべての建物が土台まで揺れ、九分間続いた最初の震動で多数が破壊されました。地震は一旦止み、やや弱まって約八十秒の間隔で再び起りました。ムーア人の美しい建造、大聖堂は無惨に壊され、再建は絶望的と思われれます。ほかの教会もすべて建物に損傷を受け、いくつかが倒壊しました。幸いだれも圧死せず、頭上に落下した聖イネス像でひとりの少女が負傷したのみです。人々はみな自宅や教会から長時間離れました。大聖堂の参事会員ドン・ベドロ・カブレラだけは教会に留ります。地震が発生したとき、彼はミサを営んでいました。しかし、即座に避難するどころか、聖体の秘蹟を抱きしめ、地面に平伏して、忍従のまま死を待ったのです。大混乱のあとですべての町民は、カブレラが怪我もなく、無事であることに感動しました。

近郊の村落も被害を免れません。崩れなかった家がバジャランカではひとつもないのです。近隣の寒村ルークに接する山塊では地割れが生じ、亀裂から発散する刺激臭で動物が死ぬまでに至りました。

ベラルカザールでは一層奇異な出来事がありました。教会全体が四十フィート以上の深みに陥落し、その頂上が地表とほぼ同じ低さにあります。したがって、内部にいた人は鐘楼への梯子によって救出され、塔から街路へ易々と跳び降りました。グアルディアの小都市では地震が発生すると、聖母像を安置する教会へドミニコ会修道女が駆け込みました。それを護るため神器格納係が壁龕に進んだものの、覆いに遮られます。どれほど努めても、それが取り除けないのです。そこで修道院長が近寄ります。祭壇のもとで彼が跪拝したあと、覆いの裾を支障なく挙げると、手にした上掛けで顔を隠したロザリオが見えました。聖女の目には涙が溢れ、床に落ちるのを、堂内の全員が見詰めました。それを寄せ集め、銀の器に納めます。修道院長、助任司祭、町長、公証人がこうした奇蹟の真实性を明言し、保証しました。この出来事は近隣の諸都市にすぐさま伝えます。この時点からスペインの人々は公式の行列を繰り上げ、昼夜を分たず教会も一杯となり、あ

らゆる男女が聖餐に押し寄せました。

地震に關してスペインで語られる秘話をすべてここに記述するのは、長過ぎると思います。アンダルシアとその周辺の地域で、災厄を免れた村落はひとつもないことだけを、報告を踏まえ確言しておきます。難破を惹き起す風もないのに、地震がきわめて激烈であったため、カラクを出航した船舶が、波濤に打上げられ、一五〇里もの広さに散乱するのが発見されました。乗船したオランダ輸送部隊の將校たちは、晴朗な天候でも、岸壁に投げ出されると考えるべきでした。観測機に彼らは裏切られたのです。

敬具。

《追伸》地割れしたグラナダ近郊でアラブの碑文を有する巨大な墓が発見されました。この出来事について正確で詳細な報告を後日そちらにお届けしたいと思えます。

一七五五年グラナダで書かれた書簡の抜粋

スペイン通信員の追伸で伝えられた情報を確認し、やや詳しく語る書簡がここにあります。確かな情報とされるのは、グラナダの公職にある人物によって、海軍財務担当官ムッスル・ゲオルヴィル氏に宛てに書かれたからです。とはいえ、この書簡で語られる事柄の真实性がそれ以上には保証されません。

「今月一日の地震は海辺にひとつの断崖を切り拓きました。割れ目には石壁が見えます。当局がそこへ出て点検すると、玲瓏たる岩石で築かれ、円柱で飾られた一種の宮殿を発見しました。奥には石造の大きな霊廟が建立され、なかに頭部のないムーア人の遺体がひとつありました。ほかの部分は完全に保たれ、瑞々しい肌色はいま殺されたかのようです。豪華な織物で作られた上衣を纏い、宝玉を帯びています。墓の側には故人を模したと思われる石像がありました。右手には槍を、左手には点灯された燭台を持つのです。霊廟の側面にはムーア女性の遺体がひとつ横たわり、燦然たる寶石で飾られ、胸の真中に短刀がありました。

その血は鮮やかな深紅であって、なお流れるかに思われたのです。靈廟に刻まれた碑文はアラビア語でした。これを判読した者には五十ドブロン（現在の国の通貨にして一〇〇ピストル）が約束されました。また、寄木の床には多くのグイヤモンドを添えた華麗な衣服もありました。言い忘れましたが、女性の胸に刺された短刀は、遺体のムーア人が所有して、腰帯に携えていたものと思われれます。現場には警備員が配され、公の任務でなければ見られません。警嘆すべきものがあれば、次回の通信で詳しくお伝えします。 敬具。」①

スペインからの報告では津波の脅威や民衆の艱難も印象的であるが、宗教施設の連鎖的な壊滅と素朴で固陋な信仰の描写で傑出している。そうした信者と聖職者の振舞を行動に通信員はむしろ懐疑的であり、天災に関する宗教的僻見からの脱却が感じられる。また、大地震のあとさまざまな流言や誤報が飛び交ったと言われるが、第二便に引用された秘話は、「真実に脅威と恐怖を混入した話」の実例として読み取れる。

初出 二〇二二年十二月三日

更新 二〇二一年 八月 七日

① Lettre du Correspondant Espagnol du Journal *Eranger* à M. Fréron, dans *Journal Eranger*, janvier 1756, pp.209-219.